

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究（B）

研究期間：平成 23 年度～平成 24 年度

課題番号：23730745

研究課題名（和文） ガダマーの哲学的解釈学を中心にした教養論に関する研究

研究課題名（英文） Studies on Theories of Culture(Bildung) Focused on Philosophical Hermeneutics of Hans-Georg Gadamer

研究代表者 大関 達也（OZEKI TATSUYA）兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：80379867

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ガダマーの哲学的解釈学を教養論の観点から再検討し、その現代的意義を提示することにある。その主要な論点は、差異や異質性の経験を内包したポストモダン的世界において、教養はいかにして可能かを論究することである。ガダマーの教養論、および哲学的解釈学における他者との対話の問題について検討した結果、次の点が明らかとなった。1. 自己教育、あるいは自己陶冶は他者との対話を通して行われる。2. 予測不可能な他者との対話が論じられていない。この点に、哲学的解釈学の限界がある。3. 哲学的解釈学は伝承された文化内容との対話に取り組みることにより、「文化の公共圏」を形成するための論理を明確にするという点で、市民的教養の理論を補完するものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of these studies are to clarify the significance of Gadamer's philosophical hermeneutics from the viewpoint of theories of culture(Bildung). The main point of the argument is to ask: how is culture possible in the postmodern world including the experience of difference and heterogeneity? In Gadamer's theory of culture and philosophical hermeneutics, the important thing is as follows. 1. Self-education or self-formation is learning through dialogue. 2. Not discussing the dialogue with unforeseeable others. This is the limit of philosophical hermeneutics. 3. Philosophical hermeneutics clarifies the way to forming the public circle of culture and complements the theory of civic culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教養、対話、哲学的解釈学

1. 研究開始当初の背景

今日、教養についてはさまざまに語られている。しかしその多くは、市民性の理念や理性をもつ普遍的個人の尊厳を再確認するにとどまっており、教養の具体的な内容や教授法についての検討は課題として残されたままである。また、教養の概念規定についても、戦前にドイツから移入された *Bildung* の概念や、戦後にアメリカから入ってきた *general*

education、*liberal education*、*liberal arts* などの概念が混在しており、それらがどのような歴史的脈のなかで生成し、我が国に受容されたのかが十分に明らかにされていない。その結果、教養の具体的な内容についても、教養教育の有効な方策についても、生産的な議論がなしえない状況にあるのではないだろうか。

そこで本研究は、我が国の教養教育の議論

に資するための基礎的研究として、ガダマーの哲学的解釈学の可能性について検討するものである。具体的には、異なる伝統・文化を背景とする他者との対話として教養を実現するための方途を探究することが、本研究の課題となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ガダマーの哲学的解釈学を教養論の観点から再検討し、その現代的意義を提示することにある。その主要な論点は、差異や異質性を内包したポストモダンの世界において教養はいかにして可能かを論究することである。

これまでの研究では、次の点が明らかになっていた。

(1) ガダマーの哲学的解釈学は、時代の隔たりや異文化間の差異を利用した対話、すなわち「多元的意味世界における対話」として、教養を捉え直す可能性を示唆するものである。

(2) ガダマーの哲学的解釈学では、現代社会で求められる個人の理性使用と判断力の可能性が示されている。

これら二つの点を踏まえつつ、さらにガダマーの教養論、および哲学的解釈学における他者との対話の問題について検討することが本研究の課題である。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の検討

まず、教養の歴史社会学的研究、思想史的研究、概念史的研究等、先行研究を収集・整理し、それらの批判的検討を行う。また、我が国における教養概念を整理し、さまざまな外来の概念の歴史的由来、そうした概念の日本における受容過程を解明する。そして、多文化社会、グローバル化社会における教養教育の意義について論じた先行研究の収集、検討によって、教養教育の現代的課題を明らかにする。

次に、ドイツ的教養の概念史的研究、比較社会史的研究等、先行研究を収集・整理し、それらの批判的検討を行う。また、ドイツ的教養の現代的課題の検討については、ドイツばかりでなく、イギリスの教育哲学会関連の雑誌でもすでに行われているので、情報・資料収集を行う。国内で入手できないものについては、ベルリン教育史研究図書館等から資料を収集する。

さらに、ガダマーの詩解釈や脱構築(J. デリダ)についての論文の収集、翻訳、批判的検討を行う。ガダマーの講演記録等、国内で入手できない文献・資料や情報については、ハイデルベルク大学附属図書館等を訪問し、収集する。

(2) ガダマーの教養論の検討

ガダマーの著書『教育とは自己教育である』(2000)で展開される教養論の意義と問題点を明らかにする。この著書で展開される教養論は哲学的解釈学の問いを再考する上で重要な論点を含んでいる。にもかかわらず、従来の研究では、そのことが検討されないまま残された課題となっていたのである。

(3) 哲学的解釈学における他者との対話の問題の検討

他者との対話という主題をめぐる哲学的解釈学の可能性と限界を確認する。その際に、本研究ではガダマーが晩年に取り組んだ詩的言語や脱構築に関する試論を検討する。すでにこれらの論考に関心を示していたデリダは、2003年にハイデルベルク大学で行われたガダマー追悼記念講演で哲学的解釈学に対する再評価を試みている。この講演で提示された「途切れない対話」という主題は、脱構築と哲学的解釈学の間共通点と相違点を示唆するとともに、両者の関係を排他的なもののみならず従来の一般的な見解に対し、一定の修正を促すものである。にもかかわらず、従来の研究では、この事実を踏まえた哲学的解釈学の再検討が課題として残されていたのである。

4. 研究成果

(1) ガダマーの教養論——『教育とは自己教育である』を中心に

①対話によって学ぶこと

人間が対話によって学ぶのはなぜか。その理由を説明するために、ガダマーは次の点を確認する。「教育とは自ら教育するということであり、陶冶とは自ら陶冶するということである(Erziehung ist sich erziehen, Bildung ist sich bilden.)」。

それでは、なぜ、教育は自己教育であり、陶冶は自己陶冶なのか。この点について、ガダマーは言語習得を例にして説明する。言語習得は親のもとで言葉を話し始める幼い子どもから始まる。幼い子どもは親の言葉をもとに自分や動物の名前を習得していく。子どもが意味のわからない大人の言葉の真似をして満足感を得ている場合、そこではすでに自己教育が始まっているのだ、とガダマーは言う。なぜなら、言語を習得するプロセスでは、親や教師の働きかけは教育の一部でしかないからである。このように、「私たちは自ら教育しており、例えば教師や母親のような教育者は教育にわずかしき貢献していない」。それゆえに、教育の本質は自己教育であり、陶冶の本質は自己陶冶であるという。

さらに、ガダマーは言語習得が生涯にわたって行われるものであることを確認してい

る。子どもは親のもとで言語を習得した後、幼稚園、学校へと進む。他者との関係、つまりコミュニケーションを通して言語は習得されていくのである。コミュニケーションによって世界に慣れ親しむというプロセスが満たされる。このプロセスをガダマーは陶冶と呼ぶ。陶冶によって形成されるのは、特殊な専門能力ではなく、一般教養である。このようにガダマーは、自己教育、あるいは自己陶冶が他者とのかかわりの中で対話を通して行われるものであり、また、そうした対話によって異質な世界に慣れ親しむというプロセス、すなわち学びのプロセスが実現するものと考えている。

その際に、母語の習得とともに重視されるのは外国語の習得である。なぜなら、外国語の習得が他者を経験するための導入となり、自己の慣れ親しんだ日常世界を揺るがすものとなるからである。とりわけ、読書による相互了解は自己の世界を拡張させることになる。その際に、学校の教師には学習指導計画にとられない授業が求められる。なぜなら、外国語の授業で大切なのは、学習指導計画に沿って文法を学んだり、文章を誤りなく正確に書いたりすることばかりでなく、語り応答する対話の実践だからである。「最も大切なのは、尋ねられたら答えられること、自ら問いを立て、相手の答えを受け取ることができるということではないかと私には思われます」。外国語の習得の場面では、世界においていつも他者と共存しているという事実が学ばれる。つまり、「世界内存在」あるいは「共同存在」という事実が自己教育・自己陶冶の基盤となっているのである。言語習得の例から明らかになるのは、自己教育・自己陶冶の相互性である。「私たちの世界内存在では、いかに他者がいつも私たちと共に居合わせているか、ということになるのですが、それはまた一般的に認められる事実です。こうした事実は、子どもたちの間にも外国語の間にも認められるのです。それゆえに、互いに自ら教育するという結果になるのです」。

したがって、ガダマーが言語習得を例にして自己教育・自己陶冶を問題にした理由は、第一に教育における技術的操作の限界を指摘するためであったと言える。子どもが家庭や幼稚園や学校での生活で言語を習得し、世界に慣れ親しんでいくプロセスは、完全に計画し、操作することができない。その意味で教師や大人の教育的働きかけには限界があるというのである。

そして第二に、言語習得のプロセスでは自己と他者の関係が不可欠となる以上、自己教育・自己陶冶は対話の中で行われるということを描くためであった。つまり、人間が対話によって学ぶのは、自己教育・自己陶冶が他者とのかかわりの中で相互的になされ

るからである。このような自己教育・自己陶冶を促すものとして、ガダマーは自発的な研究グループや学習サークルを例に挙げている。対話によって学ぶプロセスは、「世界内存在」あるいは「共同存在」という事実に基づいて「他者と共存していくこと」を意味していたのである。

②対話によって学ぶことはいかにして可能となるか——哲学的解釈学における問いの再構成

ガダマーの教養論は哲学的解釈学とどのように関連するのか。そこで注目されるのが、「言語は対話の中でのみ成立する」というガダマーの主張である。このような言語観が教養論と哲学的解釈学をつなぐものと考えられる。なぜなら、教養論で解明される「対話によって学ぶ」という事態も、哲学的解釈学で究明される「対話によって理解する」という出来事も、言語によって媒介されるものと想定されているからである。そのことは、ガダマーの次の発言に示唆されている。「したがって私たちは、私自身の哲学的世界において決定的に重要な観点であると思われる事柄の真ただ中に入ってきました。すなわち、言語は対話の中でのみ完全に実現するということです。これを実際になしうるのは、教師にとっても限られた可能性でしかありません。ある一定のカリキュラムの統一が守られなければならないのは、まったく明らかです。しかし、それでも決定的に重要なのは、結局、成長しつつある者に自分自身の知識不足を自分の活動によって補う能力を与えることなのです。自己教育とは、とりわけ、私たちが自分の弱点に気がついたときに自分の力を強くするものです。この教育は学校に任せたり、成績証明書にある評点に委ねたりするものではありませんし、良い成績で親から褒美を与えられるようなものでもないのです」。

ガダマーは『真理と方法』で「理解はいかにして可能となるか」という問いを立てている。この問いは精神科学だけに向けられるのではなく、「人間の世界経験と生活実践の全体」に向けられる、とも述べられていた。やがて『プラトンとアリストテレスの間における善のアイデア』(1978)で古代哲学研究が暫定的な完成に達したとき、ガダマーは哲学的解釈学の構想がソクラテス的対話の原理に導かれてきたことを強調している。この観点から哲学的解釈学の問いを捉え直すならば、「対話はいかにして可能となるか」という問い、すなわち対話を可能にする条件が問われることになる。さらに、この問いを教養論の観点から捉え直すならば、「対話によって学ぶことはいかにして可能となるか」という問いが成立する。すなわち、他者との対話とし

ての教養を可能にする条件が問われることになる。

哲学的解釈学は、伝承された文化内容との対話により、過去に書かれたテキストを生きた声として現前させることを課題としてきた。このようなテキストとの対話は翻訳においても起こるといふ。つまり、時代の隔たりや異文化間の差異が自覚されたときに、解釈者自身の先入見が働き出し、異質なものととの間で対話が行われる。このような対話によって、テキストの意味が解釈者自身に適用され、解釈され、理解される。この過程をガダマーは「地平の融合」と呼んでいる。それは、自分とは異なる観点から自分自身の先入見を批判的に吟味して、真理探究へと向かうプロセスである。このような対話こそ、ガダマーにとって「哲学すること」であると同時に「学ぶこと」を意味していた。

したがって、ガダマーの教養論は、他者との対話によって学ぶことの可能性を問うという観点から、哲学的解釈学における問いを再構成し、その主題を浮き彫りにするものであったと言える。他者との対話という主題について論究する際に、語りえないもの、非言語コミュニケーションの存在は、確かに軽視されてはならないであろう。しかし、それらを語りうるものの領域から切り離し、神秘化することは、対話の可能性そのものを否定することになりかねない。対話によって学ぶことは、他者を自己に同化したり、語りえないものとして神秘化したりせずに、他者の言葉に傾聴しつつ応答する実践となるであろう。

しかし、ガダマーの教養論には検討すべき課題が残されている。それは、教える者から見た学ぶ者の他者性をどう捉えるか、という問題である。ガダマーの教養論では、確かに親や教師が子どもの成長を技術的に操作することの限界は示されている。しかしながら、教育と陶冶が区別されることなく、自己教育・自己陶冶の相互性のみが強調されるため、「学ぶ」という行為に対して「教える」という行為が積極的に語られることはない。つまり、「教える」という行為の権力性、あるいは「教える」側から見た「学ぶ」という行為の偶然性・予測不可能性が主題にならないのである。

確かに、このような問題は、ガダマーが論じるべき事柄ではないであろう。しかしながら、教育の場面を想定して他者との対話を論じる場合には、「教える」立場の視点に立つことが重要になる。なぜなら、「教える—学ぶ」という関係で問題になる他者との対話は「話せばわかる」式の連続的なコミュニケーションの過程というよりも、むしろ、教えたからといって思い通りに学んでいる保証はないということが前提になるからである。つまり、教える者と学ぶ者の間には容易に媒介

しえない断絶と飛躍があるからこそ、「教える」立場から見て学ぶ者が予測不可能でコントロールしえない他者として現れるのである。このような他者との対話を視野に入れるためには、「学ぶ」側の視点から自己教育・自己陶冶の相互性を主張するだけでは不十分なのである。

そこで次に検討したいのは、哲学的解釈学における他者との対話とは何を意味するのか、という問題である。ガダマーが晩年に取り組んだ詩的言語や脱構築に関する試論、およびそれらに対するデリダの発言は、他者との対話という主題をめぐる哲学的解釈学の立場とその問題点を浮き彫りにするものである。これらを手がかりにガダマーが教養論で語らなかつた哲学的解釈学のもう一つの可能性を示すことで、教育者の教育的行為を他者への応答として積極的に捉えていく道を探究してみたい。

(2) 哲学的解釈学における他者との対話

①対話としての詩

詩と対話することでガダマーは、詩作と哲学的思索に共通する「言葉探し」(Sprachfindung)の問題を考察している。ガダマーによれば、「言葉探し」はかけがえのない他者を求めてあてもなく彷徨する旅にたとえることができる。『私とは誰であり、おまえとは誰なのか?—ツェラーンの連作詩『息の結晶』注解——』(1986)では、詩に登場する「私」とは詩人だけでなく読者をもさしており、「おまえ」と呼びかけられている存在は読者にとっての「私」であると同時に詩人にとっての「私」でもあることが確認されている。詩の言葉はかけがえのないこの「私」に語りかけると同時に、「私」以外のあらゆる者にも語りかける。そしてあらゆる存在を「宙吊り」にし、未決定の状態に置く。それゆえに「私」は、かけがえのない存在であると同時に別様でもありうる他者として、アイデンティティーの揺らぎを経験することになる。このような「私」という存在の単独性・特異性・偶然性に気づかせるのがツェラーンの詩の特徴であるという。相手の言葉を聴き、沈黙し、それに応答する中で詩が生まれる事態をツェラーンは「息の転回」と呼んでいる。ガダマーにとって、この「息の転回」は哲学的思索に通じるものであった。それゆえに、詩も哲学もそれ自体対話であるとみなされる。

その一方で、哲学的解釈学における他者との対話は、対話の参加者たちが事柄についての合意を目指すものでもある。そのため、対話の参加者たちの間では共通の言語が探求される。詩もまた決して完全には到達できない意味ないし全体を指示するものとして想定される。それゆえに、ガダマーにとって詩

は意味の統一にまとめられるものである。

②対話を中断させる他者

ところがデリダによれば、意味の統一によって異質なものを排除することは、ロゴス中心主義の原初的暴力である。デリダは根源的な「意味の撒種」や「差延の戯れ」にとどまるものでなければ、詩の経験をするにはならないと主張する。

デリダは1981年にパリでガダマーと出会って以来、「内的対話」と呼ばれる自己内対話を続けてきたという。そのことについて、デリダはガダマー追悼記念講演で次のように振り返っている。「おそらく対話は続くが、それは生き延びる者のもとで、その航路をたどるのだ。生き延びる者は、他者を自分のうちに保存していると思っているが、彼はすでに他者の生前からそうしていたのであり、今後は自分の内部で他者に語らせるのである」。デリダが自分の内部でガダマーに語らせようとしているのは、対話の中断についてである。かつてデリダは、相互理解の前提に理解し合おうとする「善き意志」や「生の連関」を置くガダマーに対し、理解の条件は関係の中断であり、あらゆる媒介の「宙吊り」ではないかと疑問を投げかけていた。そのことを想起しながら、デリダは次のように述べている。「その問いは、誤解の確証ではないにしても、試練を、対話の表面的な中断を印づけたと同時に、私たちそれぞれの内での内的対話の開始を、潜在的に際限のない、ほとんど連続的な対話の開始をも印づけた。私はたしかにそのとき、ある種の中断に訴えた。対話の挫折を意味するどころか、理解と合意の条件になる中断もありえたのだ」。

デリダにとって、中断は対話を可能にする条件である。そのことはガダマーの哲学的解釈学にも同様に認められる。しかしデリダは、合意を目指すよりも中断にとどまろうとする。これは決定不可能なものを未決定のままにしておくということである。ガダマーがツェラーンの詩を解釈しつつ、「おまえ」とは誰かという問いについて「詩は何も決定しない」と述べていることに、デリダは敬意を表していた。「未決定そのものよりも、ガダマーが未決定という場所に対して示した敬意に、私は感嘆する。未決定は、解読を中断したり宙吊りにしたりしているように見えるが、実はその未来を保証しているのである。未決定は、永久に注意を引きつけて息づかせる」。

対話に中断がもたらされ、自分自身が問われるべき存在になるからこそ、対話は無限のプロセスとなる。そのことはガダマーにとって、他者の言葉に傾聴し、自己の有限性を自覚する経験であった。したがって、「途切れない対話」という主題は脱構築と哲学的解釈

学に共通するものであると言える。しかしながら、その目指すところが両者では異なっている。哲学的解釈学では相互に孤立したように見える生活形式を連続性・統一性のある歴史的・言語的世界に再統合することが問題となるのに対し、脱構築では他者に対して自己が担うべき責任が問題となるのである。

③他者に対する責任と倫理

他者を担い、他者に責任を負うとはどういうことなのか。この問題はデリダが自己内対話の中でガダマーに問いかけようとしたことである。その際に、デリダが想定している他者とは死者である。自己内対話を続けるとは喪に服することである。死は世界の絶対的な終わりであると考えているデリダにとって、生き延びる者が死者に対して負う責任は孤独なものである。「そのとき、生き延びる者は、ただ独りで残されるのだ。他者の世界を超えて、生き延びる者は、同様にしていれば世界そのものを越えているか、あるいはその手前にいる。世界の外の世界、世界を奪われた世界の中にいるのだ。彼は、少なくとも自分がただ独りで責任を負うものだと、他者をも彼の世界をも担う定め、消滅した他者と消滅した世界そのものを担う定めを負うものだと感じている。世界なしに、どんな世界の土地もなしに、以後は、世界の終わりの彼方の地の果てのような、世界なしの世界の中で、ただ独りで責任を負うものだと感じている」。

このように、他者を担うことはかけがえのない行為である。他者を担うことの単独性・特異性を示すために、デリダはツェラーンの詩「雄羊」にある「世界は消え失せている、私はおまえを担わなければならない (Die Welt ist fort, ich muss dich tragen)」という一節を引用し解釈している。担うべき相手である「おまえ」には、今ここにいる人間のほかに、動物、新しく生まれてくる者、死者も含まれる。これらを「担う」とは、予測不可能な存在に対して語りかけることを意味している。このような他者への応答をすべての人に課せられた責任とすることで、デリダは倫理を問題にしていたのである。

他者への応答可能性が「途切れない対話」の前提である。そのことをデリダは哲学的解釈学の内在的批判により明らかにした。確かに、哲学的解釈学でも脱構築とは別な観点で倫理が問題になる。ガダマーはアリストテレスの実践哲学に依拠しつつ、倫理的な決定の場面で求められる社会的連帯の重要性を明らかにしていた。しかし、それは対話の前提となる他者への応答可能性までを論じたものではない。したがって、デリダの到達した倫理の構想はガダマーが語らなかつた問題を含んでおり、「対話の中断」から発展した哲学的解釈学のもう一つの可能性であると

考えられる。

(3) 哲学的解釈学の現代的意義

本研究の目的は、哲学的解釈学を教養論の観点から再検討し、その現代的意義を提示することにあった。すなわち、差異や異質性の経験を内包したポストモダン的世界において、教養はいかにして可能か、という問いを立て、そうした観点からガダマーの教養論、および哲学的解釈学における他者との対話の問題について検討することを課題とした。

まず、ガダマーの教養論から明らかになったのは、自己教育、あるいは自己陶冶が他者とのかかわりの中で対話を通して行われるという点である。異質な世界に慣れ親しむという陶冶のプロセス、すなわち学びのプロセスは対話によって実現するのである。このような対話は教育者によって操作することができないものと想定されている。したがって、ガダマーの教養論は差異と異質性の経験を内包した教養論として示唆に富むものと言える。

しかしながら、ガダマーの教養論は学ぶという行為のみが重視されており、教えるという行為を積極的に論じたものではない。そのため、教える者から見た学ぶ者の他者性が十分な形で主題にならないのである。この点は、哲学的解釈学における他者との対話の問題にも通じている。それに対し、予測不可能な他者に対し応答する責任を負うことを倫理とみなす脱構築の視点は哲学的解釈学の問題性を浮き彫りにするとともに、教育者の教育的行為を他者への応答として積極的に捉えていく道を示唆している。この点についての検討は引き続き今後の課題としたい。

それでは、哲学的解釈学は教養の現代的課題にどの程度応えられるのか。一つ言えるのは、現代の市民的教養の構想を補う視点を哲学的解釈学が持っているということである。古典を中核とするエリート教育のオルタナティブとして提唱された市民的教養は伝承された文化内容に対する視点が弱い。そのため、「文化の公共圏」を形成するための論理が必ずしも明確ではない。さらに問題なのは、現代における共通教養として想定されるリテラシーが文化内容を伴わない形式的な情報操作能力やコミュニケーション能力に矮小化される危険性があるという点である。それに対し、伝承された文化内容との対話に取り組む哲学的解釈学は、このような市民的教養の弱点を補うことができるものと考えられる。こうした哲学的解釈学の長所を生かしつつ、他者との対話の原理によって教養の概念規定、教養に必要な内容の選択、教養教育の有効な方策をいかにして具現化していくかは、今後検討すべき課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 大関達也、他者との対話としての教養—哲学的解釈学の現代的意義—、ディルタイ研究、査読有、第23号、2012、pp.106-122

〔学会発表〕(計1件)

①大関達也、他者との対話としての教養—哲学的解釈学の現代的意義—、日本ディルタイ協会関西研究大会シンポジウム、2012年7月7日、関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大関 達也 (OZEKI TATSUYA)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：80379867